《3》横浜でつながりを創る人々に伺う

④ 世界で一番、地域と密着な宿を作る「多世代多国籍なつながりを作ることで人々の日々の生活を一層豊かなものに」

旅で一番印象に残ったのは人との交流

２０１１年４月、大学院を１年休学し、友人と二人でユーラシア大陸自転車横断の旅に出ました。教育学部だったこともあり、旅を通して子どもがハッピーになるプロジェクトができたなら、子どもにとっても良いし、自分たちとしてもやりがいがあるのではないか、と思ったことがコネクション・オブ・ザ・チルドレン（略称：ココ）の原点です。

世界を旅する以前も自転車で日本全国を回る旅をしてきましたが、その中で一番印象に残っているのは人との交流でしたので、人とのつながりを我々の活動の中心にして、それを子どもたちに伝えようと二人で考えました。

ココは２０１３年10月にＮＰＯ法人となり、現在12名が「世界を１つの大きな家族に」をテーマに活動しています。

人をつなぐ３つの事業

今私たちは３つの事業を展開していますが、ココの原点であり、今も継続している象徴的なプロジェクトが「糸つなぎプロジェクト」です。子どもに約20センチの糸を結んでつないでもらい、目には見えない世界中のつながりを視覚化するもので、横浜市内の小学校から最初の糸をスタートし、ユーラシア大陸の旅先で出会った子どもにつないでもらいました。現在43カ国８，７３１人の子どもによって糸のつながりができています。

ユーラシア大陸からの帰国後、最初の糸をつないでくれた小学校を訪問し、旅先の子どもが糸をつなぐ話をしたところ、もっと色々な旅の話をしてほしいということで始まったのが、２つ目のプロジェクト「プラベルケーション」です。これは、ＰＬＡＹ（遊び）とＴＲＡＶＥＬ（旅）とＥＤＵＣＡＴＩＯＮ（教育）を合わせた教育プログラムで、受講者は、楽しく旅するように、コミュニケーション能力や、多文化共生の力がつきます。さらに、各地でプラベルケーションの講座を開催し、子どもに旅の話や世界の遊びを教えているうちに、今度は海外の人と実際につながることが出来たら良いよね、というお話を聞くことが多くなりました。

私も旅で巡った様々な場所で出会った人とたくさんのつながりができ、そこで自分たちを家族のようにもてなしていただいたので、日本に帰ったらその方々に恩返がしたいと考えていたところでした。日本に来る旅人に同じようにおもてなしをして、彼らがまたそれを誰かに伝えて、ありがとうの連鎖がつながっていくような場所。そこではプラベルケーションも実施し多世代多国籍なつながりを作りたいと思った人が訪れる場所でもあれば、面白い仕掛けが作れるのではないか、と考え、ココの３つ目のプロジェクト「カサコ」が立ち上がりました。地域の良さを再発見でき子どもが放課後に安心して遊べ、旅人が日本の素晴らしさに触れられる開かれた空間。

当初は、まちづくりとか、コミュニティをつくろうとか、地域を活性化させようとかは正直あまり考えてはいませんでした。海外から来る人を受け入れて、そこで日本のディープな文化や、ローカルなつながりを作れば素敵だろうな、その程度でした。ただ、それをするには自分がローカルに溶け込まなくてはだめだということをその後痛感し、カサコという場所を作ることで、どうすれば地元の人も、子どもも、旅人もハッピーになれるのだろうか、と考えるうち、徐々にそれはまちづくりでもあるのだな、と気づきました。

引っ越し初日に町内会に入会

２０１４年１月に東ヶ丘に引っ越してきまして、その日のうちに町内会会長を訪ね、町内会に入りたいことを伝えました。最初は、若者が引っ越してきてわざわざ町内会に入りたいなんて言いに来るはずがないと思われていたようですが、とても親切な町内会

加藤　功甫 さん
特定非営利活動法人コネクションオブザチルドレン（ココ）代表理事。２０１１年ユーラシア大陸２万キロを自転車で横断しながら、人とのつながりを見える化するプロジェクトを実施。２０１４年から西区東ヶ丘で「地域・子ども・旅人」に開かれた空間「カサコ」（「ココの家」の意）を通じて、多世代多国籍な交流を幅広く展開中。「カサコ」は平成27年度ヨコハマ市民まち普請事業整備助成対象に選定されている。

聞き手
渡部　清香
西区区政推進課

長さんで、せっかくだからと1週間後に町内で開催される餅つき大会に誘っていただきました。それがきっかけでいろいろな方にお会いすることができ、自分を知ってもらう良い機会になりました。最初は、なかなか地域に溶け込むのは難しいという印象がありましたが、幸い町内会の役員の方たちはとてもオープンで、すぐ飲み会や地域の行事に誘っていただけるようになりました。そこで東ヶ丘について教えていただいたり、自分の活動の話をしたりして、いろいろと相談できる関係になりました。

今でも班長会や○○会と言う会合があれば、必ず顔を出すようにしています。町内会のほかにも地域の長老たちがあつまった「ほのぼの会」という老人会にも時々参加して、みんなでサクランボ狩りに行ったりしています。ただ、なかなか町内の役員以外の方々と接する機会が多くとれないなと感じ、もっと多くの方にカサコを知ってもらうため、2014年6月から町内新聞を始めました。これを毎月開催の班長会でお配りし、回覧板や広報よこはまと一緒に全戸分配布しています。また、地域の方々に実際にカサコにお越しいただき、カサコのプロジェクト説明会を開催することで、多くの方と顔見知りになるきっかけを模索しています。

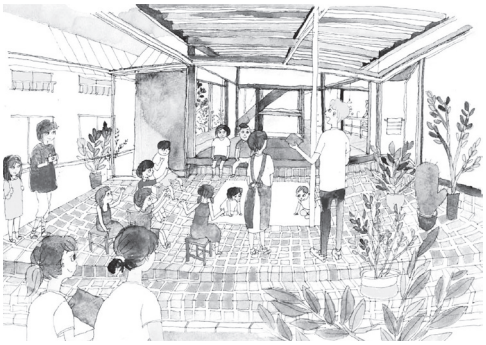
地域の人とのつながりづくりに近道はないと感じています。人が面倒に感じることを自ら進んでやり、できるだけ地域の行事に参加することで、少しずつ、人と人とがつながっていくような気がします。

もともと、コミュニティデザイナーになるという意識は全くなかったです。本当に純粋に人と人がつながっていくことがすごく面白いし、実際に自分も全く知らない人とつながることで新しい発見が生まれたり、新しい世界が見えたりとかすることがたくさんあったので、それを他の人にも感じてほしいと思って、いろいろな活動をしてきました。

東ヶ丘に来られたおかげで、私自身の視野もさらに広がり、町内から始まったつながりが、西区へ、横浜市へと広がってきました。ただし、やっていることは以前と大きく変わることはなく、面白そうな人に会って別の面白い人とつながってもらう。そういうことをしているうちに、色んな人からカサコに行けば面白いつながりができると言われるようになり、気づいたら今に至っていたという感じです。

カサコの外観

カサコワークショップの様子


カサコの将来像。
地域、子ども、世界に開かれた空間へ

町中をおもてなし特区に

今後もカサコを段階的に発展させて多世代・多国籍の交流できる場所にしていくために、現在、建築、まちづくり、教育と旅のプロフェッショナルがチームを組み、新たな可能性を考えながら活動しています。将来この場所が「世界で一番地域に密着した宿」になれたらと思っています。宿やカフェになるとみんなも来やすいですし、みんながつながりやすくなる。そんな地域のハブになることを目指しています。

東ヶ丘だけではないと思いますが、地域コミュニティにおいて多世代間の交流をする機会は希薄になり気味で、さらに日本人の典型として海外の人を一歩ひいて見てしまうところがあると思います。なのでまずは多世代間の交流、特に町内や、より小さいグループでの交流をカサコで作り、そこに少しずつ海外の人や留学生が来ることにより、面白い海外の人がいたり、英語以外をしゃべる人がいたりすることを感じてもらえればと思います。次のステップとして地域の方プラス海外の人がカサコに泊まれる場所になればいいと思っています。ゆくゆくは東ヶ丘全体で海外の人を迎え入れ、町中がおもてなし特区のように世界に開かれていく場所になれば、まち、区、市レベルだけではなく国として面白くなると思うのです。

この先も東ヶ丘に住み続け、結婚して、自分の子どもが町内に育ててもらえるような関係になっていればいいと思います。他の場所にカサコ№2を出したり、既存の空き家の再生をしたり、海外にもカサコを作り新しいつながりを作ってみたいと思っています。

【インタビューを終えて】

加藤さんに初めてお会いしたのが今年5月、世界一過酷なレース「サハラマラソン」を完走された直後でした。エネルギー溢れる加藤さんと話していると、こちらもワクワク元気になります。持ち前の明るさとフットワークの良さで、横浜がますますエンパワメントされることが楽しみです。（渡部）